

ヤコフ・ペトロビッチ・ツォイ 高麗人 1932年5月24日生まれ 年金生活者 元建築技師

2004年6月取材 聞き手：姜信子/岡田一男 翻訳/構成：岡田一男

はじめに

私は1932年生まれで、極東の出身です。私たちの一族は1937年まで極東のポシェット地区近くの小さな村に暮らしていました。両親には6人の子どもがいて、私は、その末っ子でした。1937年に、ここカザフスタンにやってきて、それからは基本的にカザフスタンで暮らしています。来たときには8人だったわけですが、今では一族は50人以上に増えています。一族が定住したウシトベに私が帰郷しようものなら、親戚も含めて7-80人がすぐに集まります。私たち高麗人は非常に長幼の順にきびしく、父や兄の権威はたいしたもの。父は、自分一人では大切なことは決断せず、かならず長兄の意見を聞いておりました。私も幼少の頃から兄に向かっては、「お前」呼ばわりは絶対せず、敬語で呼んでいました。私のような年齢になったとしても年上の者の前でたばこを吸うと言うことは控えます。どうしても吸いたくなかった時は、ちょっと席を外して、そこで心おきなく吸うといった具合です。今でも、現在私には3人の息子たちがいますが、私を訪ねて来るときには、私の好きなコニャックなどを手みやげに携えてやってきて、私に対する敬意を表します。私たちは民族的な伝統であるこのような習慣を大切に思っています。私たちもより年上の者、両親などに敬意を表すことで、若い世代に模範となるよう心がけています。こうした民族の伝統が失われたら、いかに経済的に成功しても人間としては不完全な者に過ぎないと私たち高麗人は考えるのです。

私たち高麗人の強制移住

ご承知のように1937年に、私たち極東の高麗人は、日本のスパイだという不当な濡れ衣を着せられました。そしてNKVD（内務人民委員部＝当時の秘密警察）のあげた極東からの高麗人追放計画をスターリンが承認しました。我々にはほんの2-3日しか移住の準備が許されませんでした。我々は1台の貨車に6-8家族が詰め込まれました。一つ一つの家族が大家族でしたから、それはもう酷いすし詰め状態でした。豊富にあった食糧をろくに持って行かせなかったという仕打ちに、私はジェノサイドという側面があったと感じています。ただ私たちの家族は恵まれていました。私の年上の兄たち3人は、まだ20代の若者たちでしたが、非常に要領の良い連中で、「食糧は半分分けにしよう」と送り出し担当の赤軍兵士に交渉し、トウモロコシ、ジャガイモ、穀類など大量の食糧を貨車に積み込むことに成功したのです。当時の赤軍兵士というのは、非常に飢えていて、こういった取引には直ぐに応じて来たものでした。

ただ、ここで言うておきたいのですが、我が一家は高麗人の特性を発揮して、その食糧を貨車に乗り合わせた全員と分かち合って生き抜いたのです。長兄がその思い出を語るに、「本当に苦しく貧しいとき、人々はお互いに助け合い、団結することが出来る。だが、余裕が出てくると、利己的になってしまうものだ。」と述べておりましたが、それは本当だと思います。彼は大変優れた人物で、共産党員でもありました。社会主義労働英雄にもなり、2期にわたって州ソビエトの代議員にも推挙されました。

移送の列車の旅ですが、客車でなく貨車に詰め込まれたことは、お話ししましたが当時の私は、まだ5歳でした。でも良く覚えています。運ばれる最中の私たちは全く人間扱いされていなかった。時々列車が停車するのですが、わざわざ人目を避けようと、駅から遠く離れたところを選んで停車するのです。そして駅には近づくことを禁じられました。ですから、人々は水を手に入れようと右往左往して大変苦労しました。水を求めてさまよう内に取り残される者まで出ました。父親は50歳でしたが、年長者ということで車内に残りました。当時は、50歳ともなると年寄り扱いでした。それに私の父は、ロシア語をろくにしゃべりませんでした。唯一知っていたのは、「それは、貴方の分担、これは私の任務だ。」といった言葉だけでした。

こういう状況でしたから、多くの人間が体調を崩して死にました。特に老人と子どもが犠牲になりました。彼らが耐えきれような条件ではなかったのです。我々は最初クズイル・オルダに移送され、それからウシトベに移されました。どういうことだったのか、人々はこの試練に苦情一つ言わず、従順に恐ろしい試練に立ち向かったのです。まあ、無知で、事情を良く呑み込めていなかったということもあるかも知れませんが。

ウシトベに着いたとき、そこは全く木の生えていない荒野でした。ラクダだけが食うことの出来る棘だらけの草が、風に舞っていました。人家というか、建物は一切ありませんでした。それで我々の集団農場は、当初「第一点」と名付けられたのですが、これは怠惰なNKVD要員が、ちょうど牢獄の監房が番号で呼ばれるように、「第一点」、「第二点」と番号で呼んだのです。随分後になって「極東」とか、正式な名称が付けられた後のなっても、NKVD内部では、あいかわらず「第一点」、「第二点」と呼んでいました。ウシトベに着いたときは、もう秋の終わりでした。この集団農場では、なんとか食糧の手当を済ますと、冬越しの準備を始めました。よく竪穴住居といいますが、そうとも呼べない酷いものでした。それぞれが小さな穴を掘って、それに草で屋根を葺いて覆いました。窓などは一切なく、小さなガラス片をようやく手に入れて、土の中に詰めこんで、それをわずかな明かり取りにしました。

ようやく生き延びて 1938 年の春を迎えると、村を挙げて古いも若きも総出で溝を掘り水路を築きました。20 ほどあった集団農場に、与えられたのはたった一台の掘削機ですから、ほとんど全てを手作業で行いました。水を引いて田んぼを作ろうとしたのです。とにかく種籾は供給されました。NKVD の要員からは、こう言い渡されました。「これで 3 年分だ。我々はお前らが、半分でも生き延びられるなら上出来だと思っている。後は、生き延びられようが、死んでいこうが、それはお前ら次第だ。」と。

水を引いたその田んぼですが、荒野とはいえ、畑作が行われてこなかった土地には養分がたっぷり詰まっています。秋には、信じがたいような大豊作となったのです。1 年後、少しは生き延びた奴もいるかと様子を見に来た NKVD の連中は驚愕しました。飢えて死ぬどころか、集団農場には食糧がたっぷりあったのです。基幹水路建設にこそ掘削機の力はありませんでしたが、後は全く人々の手作業で成し遂げた大仕事でした。戦争が始まるまでの数年間、むろん衣類が手に入らないなど不自由はありましたが、我々の集団農場では食糧に困ると言うことは、一切ありませんでした。ただし、我々は「特別移住者」ということで、ウシトベ地区を離れる移動の自由が無く、各人が地区警備本部に月一度の出頭を義務づけられていました。

ところが戦争が始まると事態は一変しました。6 月に戦争が始まって、全ての食糧は前線で戦う軍隊へと供出させられました。秋には（収穫の後でも）食糧の余剰がほとんどありませんでした。高麗人たちは、食糧を隠すと言うことをほとんどしなかった。それどころか、大人たちは布切れを見つけては、手袋や靴下を縫っては、前線の兵士のための慰問袋をこしらえて、ウシトベから送り出していました。我々は悪いのは、意地の悪い NKVD の連中で、まさかそれをやらせているのが、スターリン自身だったなどとは考えにも及ばなかったのです。だから高麗人も飢え死にするときでも、スターリン万歳と叫んで死んでいきました。当時のスターリンは、我々にとって神、そのものでした。

ご存じのように高麗人は信用できない連中として、徴兵されませんでした。しかし、労働力となりうる男性は、「労働軍（労働戦線）」と称するものに参加させられて、炭坑などに送られて働かされました。畑仕事には熟達した高麗人も、不慣れな炭坑夫の仕事には適応できず大変に苦勞しました。労働軍の作業の中で沢山の高麗人が命を落としました。非常にきつい肉体労働に耐えられなかった者が沢山いたのです。高麗人にとっては大災難でしたが、国家にとって見れば高麗人の経済貢献は、大したものだったのだと思います。

私の身の回りでもこんなことがありました。私の家内の叔父のことです。かれは、コクスーに暮らしていました。

コクスーもウシトベと並ぶ高麗人の大きな居住区でしたが、そこからカラガンダの炭坑に送られました。彼は病弱な妻をコクスーに残してカラガンダに赴いたのです。私の家では、父も長兄も編入を免れたので、そういう苦労は無かったのですが、彼の妻は、ひとりぼっちで取り残されました。それで、叔父は残してきた妻を気遣って、自分の割り当ての炭坑夫用の配給食を少しずつ残して、貯まると小包にして妻のところに送っていました。ある時彼は、時間になっても当番の仕事に出ませんでした。不審に思った同僚が彼を捜すと、彼は自分のベットで死んでいました。そして彼の枕元の壁には、まだ袋いっぱいにならず、妻に送ることの出来なかった食糧の入った袋が吊ってありました。医師の見立てでは、彼は餓死したのです。我が身を犠牲にしてまでも、身近な者の事を気遣うという、これは高麗人の強い意志を表す話だと思っています。

しかし、全ての高麗人が、弱々しかったという訳ではありませんでした。実にたくましい、また要領の良い連中もいました。私の家では次男、三男が労働軍に採られたのですが、三男はちょっと知恵遅れで、要領が悪かったのですが、要領よく立ち回る次男が、それを良くカバーして二人とも無事生還しました。当時のカラガンダには、高麗人の公然のオブシーナ（互助組織）はありませんでしたが、若者たちは地下の互助組織を作って助け合いました。血の気の多い連中もかなりいて、彼らは2年目の冬に語り合ってカラガンダの炭坑を脱走し、スキーで雪の荒野を走り抜けて、驚いたことにウシトベまで逃げ延びてきたのです。残念なことに密告者がいて、彼らはNKVDに捕らえられ、今度は監獄に送られました。監獄から生還できた者は殆どいませんでした。カラガンダとウシトベといえれば列車で1日半もかかる距離です。1000キロ近くもあるかと思えます。

戦争が終わりに近づいた1944-45年頃だったか、この辺がスターリンは実に狡猾だったというか、人心を操るのが巧みだったというか、布とか靴とか消費財が集団農場に送られてきて、非常に安い値段で売られました。人々は、もうすぐ戦争が勝利に終わるのだと確信して、気分も楽になりました。こういうことは後の政治家はあまりやっていません。スターリンの治世は、全く無慈悲で、パラノイアのような側面もありましたが、アメとムチの使い分けが巧く、国家の財政が逼迫の極みにあっても、春先などに突然、食糧や消費財を安く放出して、人々の気分を高揚させました。フルシチョフ以降の施政者には見られない特徴だと思います。

強制移住されたチェチェン人との出会い

1944年の2月末から3月初め、もう雪が融け出す頃でしたが、まるでダンプカーで運んできて放り出すかのようなコーカサスの諸民族の強制移住が行われました。手始めに送られてきたのがチェチェン人でした。殆ど準備も無しに移送が行われたのでしょう。彼らは丸裸同然でした。受け入れを命じられた集団農場は、大あわてで納屋

や物置などを整理して、とにかく泊められる場所を確保して、トウモロコシや小麦粉だの食糧の配給券を手配しました。

注：ザーラ・イマーエワによれば、チェチェン人達がカザフスタンに到着したとき、車中でチフスなど伝染病が蔓延したため、着衣の蒸気殺菌が行われた。山岳部のチェチェン人達の着衣の多くは、毛編み製品で、この時、縮充してしまい、再び着ることが出来なくなって、着衣を失った多くが凍死したという思い出話を南部山岳地帯の僻村、ジウムソイ村から強制移住させられた母親がしていたという。

いまでこそ、私はチェチェン人も我々と同じ人間だと冷静に考えられるのですが、当時の印象は違いました。チェチェン人たちは飢えているばかりか、周囲に対して敵意をむき出しにしていました。こちらが懸命になって食糧を手配し、彼らを助けようとしているのに、こちらのものを盗むのです。たとえば、高麗人の大切に飼っている、たった一頭しかいない雌牛を盗んで、屠殺し、喰ってしまったりする。そんな目にあった一家は、それはもう大災難です。生活がすっかり狂ってしまう。牛乳がとれなくなってしまうわけですから。そういう点で彼らは、先住の高麗人や他の住民とのトラブルを頻発させました。

それには高麗人の若者たちも黙っておらず、腕っ節の強い連中が先頭に立って対抗しました。そのため、時には単なる喧嘩どころではない大規模な衝突が起こりました。もしも、誰かを殴った、誰かのものを盗んだと言うことが放置されたら、度重なって当たり前ようになってしまいます。放置したら高麗人はチェチェン人に好きなようにされてしまう。そんな訳にはいかないと若者たち、特にクウォン3兄弟など腕っ節の強い連中が立ち上がったのです。彼らは、盗みをはたらいた者を掴まえて、自分たちで尋問しました。お前は誰で、誰と一緒にやったのだ？といった具合にです。ところがチェチェン人というのは、絶対に仲間を売らないのです。半殺しになるほどブン殴っても、「俺は知らない」と呻くだけでした。「三人ほど逃げていったろ、あれは誰なんだ、名前を言え！」、「いやあ、俺は知らない。」と言った具合です。絶対に口を割らず、仲間をかばうのです。

こういった彼らの根性を、我々がかえって尊敬するようになりました。現在でもチェチェン人について、さんざん悪く言う連中がいますが、私は、そういう風潮には与することが出来ません。チェチェン人の気質には素晴らしいものが沢山あったからです。ただ困ったことに、カッとすると、直ぐに刃物を持ち出すような連中がいたことでした。我々の方の若者は、そういうことはしなかったのですが。それでこちらも、刃物を抜く様な連中は、絶対に頭をコブだらけにしなくては、家に戻れないようにしようと心がけました。

戦時、戦争直後のウシトベ近辺の若者の半数は、何らかの「組」を作っていました。2-3年のうちに彼らは、喧

嘩を通じて次第に一目置かれるようになり、「極東農場あたりでは、みんな大人しくしていようぜ」といった雰囲気作り出されました。

ウシトベ近辺の集団農場にいたチェチェン人、イングーシ人というのは、全部で500人くらいでしたか、大部分は気のいい人たちで、若者の中にも、良い連中が沢山いましたし、常に高麗人とチェチェン人が対立していたということではないのです。基本的には仲良くやっていたのです。それに彼らはとても礼儀正しかった。チェチェン人の女の子たちは、私より年上でも、私がまだ少年だというのに、クラブなどで出会うと、私に席を譲ってくれました。彼女らの間では、男を立てておいて自分たちだけが座っているなど、とんでもないことだったので。ということで、普段は巧くいていたのですが、時に教訓を与えてやる必要があったのです。なにしろ、そうしないと限度をわきまえない連中もいたのです。

確か戦争が終わって少したった45年だったか46年だったか、それまで巧く行っていたのですが、日に日に調子に乗る連中が出てきて、やがては険悪な雰囲気になり、クラブで殴り合いの喧嘩が起こって、10人くらいが、半殺しになって外へ運び出されました。年長者たち、農場の指導部も、NKVD要員も見て見ぬふりをしていました。そして長老が言うに、「良いかね、若い衆たちよ、手加減をしなくちゃ駄目だよ。本当に殺してしまつては駄目だからな。」と、まあそんな風に諭して不満のガス抜きをしていました。

こうした集団的な喧嘩になると、高麗人の方が必ず勝ちました。あたりまえで、こちらの方がずっと大勢だったのですから。そうして何人かが、たたきのめされると、2 - 3年は静かな時が続きます。チェチェン人たちの中にも気のいい連中が沢山いて、全体としては仲良くやれました。ですから、チェチェン人がみんな悪いという言い方は、間違っています。良い連中も、悪い連中もいたということです。

一番すごい喧嘩が起こったのは1951年のことでした。これは、はっきりと覚えている年です。というのも、私はその年に中学校を卒業してシベリアのトムスクへ行って、工科大学に入学したのです。当時、高麗人に与えられたパスポート（国内身分証明書）には、居住許可はカザフスタン共和国のみと記されていました。私は、機械工学科に入学を認められたのですが、その学科の奨学金はとても少額でした。その点で無線工学科は恵まれていて、倍額の奨学金が支給されていました。1ヶ月後、私は母が病気になったという口実で、パスポートを取り戻すと、無線工学科への編入を申請しました。これが私の失敗でした。無線工学科の審査はとても厳重で、直ぐに私は教務課に呼びつけられました。「お前さん、高麗人じゃあないか、居住許可がカザフスタンだけだつていうの

に、どうやってここに来たんだ？しかも、よりによって無線工学科志望だなんて、あきれたものだよ。」そして、赤い帽子をかぶった NKVD 要員に呼びつけられて言い渡されました「お前は、24 時間以内にトムスクから失せろ、さっさとカザフスタンに戻るんだ。」

こういう事情で秋の終わりに、トムスクからウシトベに舞い戻った私は、家で一休みしていると、集団農場の中が険悪な雰囲気になっているのに気づきました。チェチェン人の若者が、皆から敬愛されている高麗人の長老を侮辱したあげく殴打したのです。社会主義労働英雄の老人をです。当然、そのチェチェン人の若者は、高麗人の若者に殴り返されました。すると別のチェチェン人が割り込んできて、と言うように喧嘩の輪が広がっていきました。対立は個人レベルから集団的なものになって、私が気づいたときにはもう3日間、チェチェン人たちが集団農場の農作業に出てこないというのです。チェチェン人達は、家に籠もって喧嘩支度をしていました。刃物を研いだり、棍棒を用意したり、さあ高麗人と闘うぞ、というわけです。

私はもう分別が付いて来る年齢でしたので、本当は喧嘩に加わるのは嫌でした。しかし、家で寝転がっていると、高麗人の友人仲間がやってきて、参加を促しました「チェチェン人の悪どもが、高麗人の女の子を侮辱し、下品な行いをしている。ここは、あいつらに教訓を与えてやろう。」と言うわけです。私が参加を拒めば、友人連中の目から見れば、私は裏切り者という目で見られるだろうと、嫌々ながら集まりに顔を出しました。

すると、また例のクウォン・イワン、アレクセイの兄弟らが指揮を執っていました。彼らの作戦では、高麗人の若者を3隊に分けるというのです。それで中央の部隊を自分たちが指揮すると宣言しました。後の2隊の指揮を誰が執ったか覚えていませんが、私には偵察隊に入って、チェチェン人がどんな準備をしているのか見てこいと言うのです。私は喧嘩が嫌いで、殴り合いも下手でしたから、喜んで偵察任務を受けました。チェチェン人たちは用水路の反対側の橋のたもとに住んでいました。探りに行くと、向こうは、なにやら棍棒を揃えたり、喧嘩の準備に余念がありません。クウォンは、12歳くらいまでの子どもたちに沢山の小石を用意させていました。そして、この子どもたちにチェチェン人の家々の近かつかせ、喚声を上げて小石をバラバラと、投げつけさせ、挑発を仕掛けました。するとチェチェン人の若者たちが喚声を上げて家々から飛び出してきました。私は、その光景を丘の上から高みの見物で見いていたのですが、クウォンは子ども達を一気に退却させ、チェチェン人達に追いかけて、彼らを家々から引き離しました。退路を断っておいて自分たちの隊だけでなく物陰に隠れていた2隊にも合図して、挟み撃ちにしたのです。集団農場の指導部は、騒ぎを聞きつけて民警署の連中を呼びました、しかし駆けつけた民警員も、命がけで大乱闘に割ってはいる者は誰もいません。警官達が何発も空に向けてピス

トルを発射して、ようやく騒ぎを鎮めた頃には、重傷者が沢山折り重なって地べたに倒れていました。集団農場の議長は、こんな計画的な喧嘩は、弁護のしようもないと諭して、首謀者8人ほどに姿を消すよう命じました。彼らは、その晩の内にウシトベを通った夜行列車に飛び乗ってタシケント方面にうまく逃げ延びました。それ以来、私はクウォン・アレクセイの姿を見ていません。

年を経て色々考えるに、我々を人間扱いしていなかったソ連当局は、我われをお互いに対立させ、殺しあいでもさせて、我々の口数を減らそうとでも考えていたのではないか？と思うことがあります。高麗人と他の民族が、というだけでなく、クリミア・タタール人や、トルコ人など、送り込まれた民族同士、同族同士でもいさかいは起こりました。お互いに争わせて勢力をそぎ落として、統治しやすくしようという思惑があったのかも知れません。最近のチェチェン戦争を見ると私は考えるのです。お互いに理解することが大切だったのだと。一般論としてチェチェン人を悪い連中だと言うのは間違ってる、と私は自分の経験から言い続けています。喧嘩と喧嘩の間には、仲の良いつきあいがあったのです。心を通わせたとき、チェチェン人ほど信頼できる友人はいないというも事実でした。毛虫だってむげに潰そうとすれば反撃してくるでしょう。チェチェン人が激しく抵抗すると言っても、彼らが始めた戦争ではないのです。人口の半分が家を破壊されたり、国を追われて難民となったり、もう7-8年も難民キャンプにいる人々もいます。自由を彼らに与えて、チェチェンで彼らが好きなように暮らせるようにしたら良いではないですか？武装して闘っているゲリラ連中はさておいて、一般住民は、本当に可哀想ですよ。

私自身のチェチェン人とのつきあいですが、学校で一緒に学んだという経験はありません。ですから、全てのつきあいは畑仕事を通じてです。私は末っ子でしたので、父や兄からとてもちやほやと大事にされて育ちました。それでも8歳ともなれば畑仕事に出ることになります。私は畑でチェチェン人の子どもたちと農作業をしたのです。私たちはとても仲良く仕事しました。私は年上なので鋤を操りました。チェチェン人の男の子は、鋤を曳く馬のくつわを取りました。私がおの後ろについたのです。我々は少しでも収穫を増やそうと畑の畝の間に一列に、キャベツやピーツなどを植えました。昼に作業が一段落すると、チェチェン人の男の子の親兄弟がやってきて一緒にお弁当を食べました。「おや、うちの子にお弁当食べさせてくれるのかい、お前さんも、まるでうちの子同然だねえ」と、すっかりお互いのうち解けたのです。これは、本当に自然な人情というものです。

まあ彼らと我々は、よく働きもしたし、よく喧嘩もしたという仲でした。チェチェン人は、本当に働き者ですよ。ただ、私が判らなかつたのは、チェチェン人の間に、大きな帽子、パパフっていうのかな、それを被って、胸を

張って堂々としている屈強で大柄な男達で、ちっとも働こうとしない連中がいたことです。彼らは、子ども達が必死になって働き、女性達が力仕事をしていると言うのに、何もしないで平然としているのです。集団農場の作業班員たちが、何とか働かせようと試みましたが、家にいるときには、何かするのか知りませんが、畑では、その場しのぎに作業する振りをするだけでした。製粉場に穀類を運ぶときでも、高麗人の場合、男性が袋を担いで、それに女性が付き従うのですが、こういったチェチェン人の男性の場合、大きなパパフを被った男が手ぶらで、まるでバイ（中央アジアの大地主）が何かみたいに威風堂々と先頭を切って歩いてくる傍らに、大きな袋を女性が背負ってつき従っています。重さに耐えかねて女性が呻き声を発しているというのに、男性の方は平気な顔をしています。まあ、そういう伝統だというのが、習慣なのか、実にわからんことでした。こういった連中は、昼間は家でゴロゴロしていて、夜になったらどこの家へ盗みに行こうか、知恵を巡らせていたのかも知れません。

それはそれとして、チェチェン人の習慣で感心したのは年長者の権威でした。何かもめ事があっても、いったん、年長者が判断を下したら、若い者達はそれを聞いて、きちんと守った。チェチェン人の中でのこういう東洋的な年長者、長老の発言力を集団農場側でも気づいて、利用することがありました。

我々の集団農場では、チェチェン人の居住区は別になっていました。私の兄の一人の家は、チェチェン人居住区の直ぐ近くにありましたが、そこへ訪ねていくとチェチェン人とのつきあいというものが良く判りました。高麗人とつきあいのあるチェチェン人達は、実に良く高麗語（コレマル）を覚えていて、それを使って話しかけてきました。高麗人の風習も良く理解していました。一方、高麗人の家では、何か美味しいごちそうをつくると、まずチェチェン人の家の老人達のために一皿別に用意して届けました。すると、チェチェン人達も、それを見習ったのか、お返しに彼らの料理をこちらの老人達のために持ってきてくれました。善意が早いスピードで定着する方が、悪意が支配するより、勝っていました。でなかったら延々と対立してしまったと思うのです。

今のチェチェン戦争の解決策は、何か考えられますか？

一つはロシア側が皆殺し作戦でチェチェン人を全滅させることでしょうか、出来るわけがないでしょうね。抵抗している武装勢力というのは、パルチザンとも言い換えられると思います。ソ連のパルチザンもドイツ軍に抵抗して爆破工作をやっていたのですから。流血を強いられて、怒り狂ったチェチェンのパルチザンを止められる者はいないでしょう。全く普通とは異なった心理状態になっているのですから。将来の予想はつけられませんが、解決の責任はロシアの側にあるのです。この戦争を始めたエリツィンに責任を取らせ、チェチニアに行って解決策を探らせるというのはどうでしょうか。前途有為なロシアの若者たちがチェチェンで死んでいるというのに、

エリツィンは何もしないでブラブラしてるのですから。こういう大国主義的なやり方は絶対駄目なのだと思います。知るべきです。

一つの民族を何だと決めつける事のまずさについてですが、こんなこともありました。レニングラードでの出来事ですが、医科大学でパーティーがあって、我々の友人の高麗人の女の子達が私たちを招いてくれました。多くの人たちは、我々を丁寧に対してくれました。朝鮮戦争中のこと故、「アメリカは朝鮮から手を引け！」などと連帯感をあらわにしてくれていましたが、あるロシア人の若者が、「朝鮮人が、日本のスパイじゃないか？」と言ったからたまりません。私は加わりませんが、同行した2 - 3人が、その若者に掴みかかって、殴り合いの喧嘩となりました。まあロシア人の良いところは、直ぐに加勢したりして、たちまち集団の殴り合いには発展しないことですが、おかげで私たちは喧嘩の後、騒ぎに巻き込まれた女の子達から一年近くも口をきいてもらえませんでした。良い人間も、悪い人間もいるのですから、武装分子が悪いというなら、彼らを裁判にかける、それにとどめるべきなのです。一つの民族にレッテル張りをして侮辱することだけはいけません。でもスターリンはまさにそれをやってしまったのです。